慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	民主主義と社会主義 : 気賀健三教授著 現代社会主義思想 を読みて
Sub Title	
Author	伊東, 岱吉
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1948
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.41, No.8 (1948. 8) ,p.450(22)- 474(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19480801-0022
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19480801-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

民主主義と社會主義

——氣賀健三教授著「現代社會主義思想論」を讀みて——

伊東岱吉

一

第二次大戰が、米英並びにソ聯を中心とする連合國民主戰線の勝利に終るや、ファシズムという共同の敵に對して統一してきたこの共同戰線が、戰後二つの立場に分れ、二つの體制の相違を明確にして來たことは、現在における世界史發展の深奥の矛盾を露呈する現象として、われわれの最大關心事でなければならない。アメリカ的體制とソ聯的體制、資本主義と社會主義、更に端的にいへば、「反共」的立場と共産主義の立場との對立がこれである。思想的に見れば、マルクス＝レーニズムと、これを排撃する各種の見解との對立として現はれているが、同じく社會主義と稱するものにも、或ひはプロレタリア階級の立場に立つと稱するものにも、各種の見解があり、更にマルクシズムの流れを汲むと稱するものゝ中にも、大きくいつて社會民主主義と共産主義との分裂があるだけに複雜である。たゞ最近は社會主義と稱するものも所謂「容共」と「反共」とに分裂して來ているから、この點から上記の對立を一應識別することが出來る。

マルクス＝レーニズムの立場からは、民主主義を原則的にはブルジョア・デモクラシーとプロレタリア・デモクラシーとに分ち、——今次大戰後には「人民民主主義」という資本主義より社會主義への過渡期における形態が實踐的に生み出されている——これらの關係は一應明確にされているが、民主主義をかゝる階級的立場から分つことを否定するのが、マルクシズム排撃者の立場であるから、これまた一般人にとつては迷はざるを得ない。

然しむづかしい理窟のわからぬ一般人にとつても、共産主義は全體主義であつて、プロレタリア獨裁、共産黨獨裁、一部グループの獨裁であり、民主主義ではないという「反共」的立場からの批判と、資本主義的搾取の上に立つブルジョア・デモクラシーはプロレタリア階級に對する資本家階級の專制的支配を許すものであつて、眞の徹底せる民主主義ではないという共産主義者の批判とが、對立の兩極をなしていることには氣がつくであらう。

前者の立場からは、階級の根本的對立、革命の必然性は否定され、超階級的全體の利益が强調されると共に、その基調には階級よりも個人がおかれ、個人と全體の利害の調和、現存階級間の利害の協調の可能性が確認され、從つて現存秩序の漸進的改良が强調される。そしてこのための政治的方法としての議會主義が民主主義の本道とされる。

これに對して後者の立場からは、階級利害は窮極的に根本的對立をなすものと見られ、一時的妥協はあり得ても窮極的妥協はあり得ず、「個人の自由」はブルジョア的個人の自由にすぎないし、現存秩序の下においては現在の支配階級の利益のみが結局において貫かれるのであつて、その協調主義、「公共の利益」或ひは漸進的改良もまた、ブルジョア的支配を維持存續する道にほかならぬと見るから、被支配階級は革命によつて支配階級を倒す以外にその解放を求めることが出來ないと主張する。この革命の方法は、これを阻止せんとする支配階級（國內・國外）の態度如何によつて、平和的ともなり或ひは暴力的ともならざるを得ないというのである。

この立場はブルジョア・デモクラシーを全く機械的に否定するというものではない。即ちブルジョア・デモクラシーが徹底せしめられる狀態はまた、階級鬪爭の自由に行はれうる狀態であるから、革命の可能性も、これを平和的に

遂行する可能性もそれだけ大きくなる。從つてブルジョア・デモクラシーが封建制や絶對主義、或ひはファシズムによつて基本的に妨げられている場合には、この妨碍の一掃を革命の第一歩の課題とするが、ブルジョア・デモクラシーが窮極の目的ではない。

更らに、この立場からは、世界資本主義の現段階は、その「一般的危機」の深化の段階にあり、これに應じて獨占資本主義も國家獨占資本主義への移行の傾向を深めており、殊に第二次大戰後においては、嘗ての樣にブルジョア・デモクラシーの實質がそのまゝ實現される條件は體制的に失はれていると見る。つまり獨占資本が國家權力を握り、國家が獨占體の道具に轉化しつゝあり、更らにその國家の統制の急激な發展、國家的獨占の展開等を通じて、國家と癒着した獨占資本の獨裁的支配は勞働者階級のみならず、農民、中産階級等の廣汎な勤勞人民のすみずみにまでその重壓を及ぼしている。更らに戰後の資本主義の著しい不均等な發展と全般的弱化並びに社會主義勢力の著しい增大という條件の下に右の關係は國際的つながりとなつている。このように見るから、かゝる體制の下においてはプロレタリアートが民主主義を享受し得ないだけでなく、農民もプチ・ブル層も、インテリもあらゆる勤勞人民層が民主主義を實質的には享受し得ないことゝなり、從つて民主主義は存在し得ないということになる。かゝる條件の下に民主主義を實現するためには、プロレタリアートの主導の下に、これらの廣汎な人民層を組織して、人民戰線を形成し、國際的なそのつながりの下に、國家權力を人民層の手に掌握し、獨占資本、大地主等の一掃によつてその獨裁體制を倒さねばならぬというのである。ところでそこに生れる新しい體制は、プロレタリアートの主導とはいへ、プチ・ブルその他の廣汎な人民の統一戰線の支持の下に作られているから、プロレタリアートのみのものではない。封建制や、舊官僚、大土地所有や獨占資本は一掃されるが、私有財産は否定されず、農民や中小資本の所有は存續せしめられる。

從つてブルジョア・デモクラシーの原則は一應認められるが、國家權力はプロレタリアートを先頭とする廣汎な勤勞人民によつて握られ、ソヴエート形態でなく議會形態をとるが、議會の支配權は完全に勤勞人民が握つて居り、更らにこの人民政權の下に私的獨占體は國有化され、中小生産は漸次共同化され、一國の蓄積は社會主義の育成强化に向つて投ぜられるから、ブルジョア・デモクラシーではないし、未だプロレタリア・デモクラシーでもない。從つて、こゝに前記の「人民民主主義」という形態が生み出されるというのである。ところでこの形態は資本主義と社會主義の中間形態として止まるものではなく、絶へず資本主義より社會主義へ脱皮して行く過渡期の形態であるといわれるのである。窮極的には、被支配階級の存在、階級的搾取關係の存續それ自體が非民主的なのであるから、階級鬪爭を通じて、それを解放することによつて、階級を絶滅する道へ進むことこそ、眞の民主主義を實現する所以であるというのである。この立場はマルクシズムに於いて理論的完成を見、更にソ聯並びにソ聯圈において實踐的實現を見つゝあるものであるから、マルクス＝レーニズムと云はれるものこそ、これなのである。

敗戰後のわが國に於いても、言論において、實踐においてこの二つの立場は鋭い對立を示してゐる、マルクシズム・レーニズム關係の著書論文は最も多く出ており、マルクス＝レーニズムの立場からの民主主義の解說書も少くない。これに反して、マルクシズムの呼ぶ所謂、ブルジョア・デモクラシーの立場に立つまとまつた著作は比較的少なかつたが、われわれはこゝに氣賀健三教授著「現代社會主義思想論」（實業之日本社版）を得ることが出來た。本書はマルクス＝レーニズムを非民主主義と斷定し、米英型民主主義を眞の民主主義と主張する點において、かゝる立場の最も典型的な著作として、注目すべきものである。即ち本書は、「マルクス主義の一面性が民主主義に對する誤解と曲解を生み、日本の民主主義的再出發に障碍を來してゐる」との認識の下に、「この混亂を整理し」「現代民主主義の

根本的精神を明らかにする」ことを意圖せるものである。

然らば著者の積極的主張は如何なるものであらうか。その思想的源流は、ジェレミー・ベンサムの功利主義にあり、更にジョン・スチュアート・ミルのそれ、及び、其後の米英における發展に基いてゐる。即ち、民主主義は政治的方法――多數決主義――であるが、その根本精神は（一）個人の欲求追求の自由（二）利害衝突の妥協と調和、その共通基準としての理性への信頼と云ふことである。自由とは目的を實現しうることであるが、これには量的な幅があり、從つてまた各個人の利害の對立には互讓の可能性がある。妥協・協調・寛容によつて社會にとつて最大可能量の自由・幸福を實現すること、共同の利益、公共の秩序、社會全體に共通する全體としての立場、これこそ民主主義の目ざすところのものである。このためには何よりも大衆の啓蒙、教育、理性的立場の普及が前提である。然し乍ら、資本主義經濟の自由經濟的方式が全體の自由を保障する能力を失つた今日においては、制度としての自由は既に古き拘束となり、かへつて國家的拘束が、眞の社會的自由を實現する手段となつた。自由こそ目的であり、計畫經濟は手段である。かゝる方向の一例としてアメリカのニュー・ディールが擧げられる。資本主義か社會主義かの問題については、ラスキーの「危機に立つ民主主義」（一九三三年）を紹介してこれを批判し、結局、資本主義と社會主義との差は質的なものと云ふよりも量的なものと見られ、根本的對立は存在せず、妥協、讓歩を民主主義的に反覆する中に、漸進的に資本主義は社會主義に移行しうるものであると結論される。變革の方法としての獨裁か民主主義かの比較においても、その遲速能率等の技術的問題としても民主主義は決して劣るものでないとされる。以上が本書の論旨の大要である。

二

本書はマルクス＝レーニズム批判に前半をあて、後半において著者の民主主義に對する積極的主張を展開してゐる。先づ冒頭において、今より約百年前、マルクス・エンゲルスが資本主義の崩壞を豫言したにも拘らず、その豫言は當らず、更に一國資本主義の成熟・崩壞の理論にも拘らず、かへつて歐洲において資本主義的發達の最もおそいロシアにおいて、共產主義革命が行はれ、しかもロシアの實驗も未だ共產主義乃至社會主義の理想からは遠い段階にある、と云ふ現實歷史の審判の前にマルクシズムは破產してゐる筈なのに、尙も今日大きな魅力を有してゐるのは、何によるものか。これは先般の世界恐慌以來特に明瞭となつて來た自由經濟の行詰り、計畫經濟への方向が、資本主義經濟の苦痛に惱み革新を求める人々に、ソ聯の社會主義計畫經濟を聯想させ、マルクシズムへ牽引せしめるものであるが、計畫經濟への方向が萬人の認めるところであつたとしても、これがマルクシズム、或ひはソ聯的方向を內容とするものと限られたわけではない。むしろ、マルクシズム或ひはソ聯的方向は、階級鬪爭、階級獨裁を通じて計畫經濟を實現して行くものであり、眞の自由を目的とする民主主義とは相容れない。自由經濟の行詰りは自由契約、自由競爭其他の、制度としての自由、手段としての自由の限界を示すものであつて、むしろ國家的干涉が、個人的自由ではなく、社會的自由を目的として、經濟の計畫化を要求する段階に立ち至つてゐるのであつて、この全體としての計畫化への歩みが、資本主義か社會主義かと云ふ樣な一つのイデオロギーによつて定義される必要はない。民主主義の根本精神は、全體の幸福、社會的自由の增進にあるのであり、計畫經濟的革新もまたこのためのものである。これを假りに社會主義と呼ぶとしても、「社會主義が民主主義を實現するのではない。むしろその逆であると」云ふのが著者の本書を貫く立場である。

次いで、空想的社會主義よりマルクシズムへの發展を述べ、唯物史觀の概略を紹介し、唯物史觀の論理的、歷史的批判を展開する。論理的批判の主なる點は、（一）「必然の法則の時間的制約」の問題、（二）「歷史的相對主義」の問

題、（三）「唯物的解釋」の問題、に關するものであり、このうち第三のものは著者が唯物史觀の一面的偏狹性として批判の焦點としてゐる問題である。

著者の歴史觀よりすれば、唯物史觀は、多元的原理を認め乍ら窮極的には經濟が唯一の決定原因であるとして、一元化し、階級的物質的利害關係にのみ、一面的に歴史發展の動因を限局する。多元的な文化價値の中から經濟價値のみを抽出して來て、これを最終の唯一の動因とすることは、人間性の本質から見ても、歴史の現實から見ても偏狹な誤謬である。經濟史觀として歴史の一面的解釋と云ふ限定の上での立論であるならば是認し得るが、歴史の全面的理解の立場としての資格を要求することは誤つてゐる。これが著者の唯物史觀の論理的批判の結論である。

次いで著者は唯物史觀の歴史的現實的批判に移り、過去の歴史は階級闘爭の歴史であると云ふ唯物史觀の根本的命題が歴史的事實と相違することを論ずる。そして（一）階級闘爭理論は、一つの歴史解釋にすぎず、現實はこれを實證してゐない、（二）プロレタリア階級の内部に於いてさへ、その利益の考へ方、その利益の實現方法において各派が分裂しており、共産黨のみがこれを獨占しうるものではない、（三）更にプロレタリア以外に、社會には農民、プチ・ブル等の中産階級の利害關係が複雜に存する（四）最後に、社會には個人や階級を超越した、國家、民族と云ふ樣な運命協同體があり、更に廣くは全人類的博愛價値理念と云ふものもある等の理由に基いて、プロレタリア階級の立場のみを主張するマルクシズムの獨善性を指摘してゐる。

三

本書を讀んで私は綜括的に次のやうに考へた。

（一）先づ著者が積極的主張の足場としてゐる近代合理主義・功利主義思想は、勿論その始祖の時代のそれよりは相當の展開を示してゐるとは云へ、その根本的立場においては本質的には變つてゐない。然りとすれば、マルクス・エンゲルスこそ、近世合理主義思想を徹底的に批判し、その進歩性と歴史的限界性とを明確にした第一人者とも云ふべきものであつて、著者の立場並びにその思想的源流とも稱すべきものゝ批判の上に、唯物辯證法・唯物史觀・資本主義批判が樹立されてゐるのである。更にこれら思想の創始者、その古典的段階における進歩性に對し、その後の俗流化とマルクシズムに評せられる展開もマルクス・エンゲルスによつて克明に批判され、更に現代にまでこの批判の仕事をひきつぎ、これを精力的に展開したものはレーニンである。然るに著者は、マルクス＝レーニズムを批判し乍ら、これを批判するための自己の立場及び思想の源流に對するマルクス＝レーニズムの批判については殆んどふれられてゐない。著者の立場に對するマルクシズムよりの批判を通じて、著者が自己の主張を強固に樹立し、然る後にマルクシズムを批判さるべきではなかつたか。そうでなければ、お互に自己の立場を先入觀的に絶對視して議論は永久の並行線を走ると云ふ、過去の論爭が屢々陥入つたような果實なき結果となる樣に思はれる。

唯物史觀を否定される著者の歴史觀の立場に對して、これは無理な註文とは思ふが、著者も唯物史觀の一面的眞理は認めてゐるのであるから、著者の思想的源流をも含めての近世思想發展史に於けるその社會經濟的背景への考察が、一應とり上げられてよいと思ふのであるが、かゝる取扱ひは稀薄である。マルクシズムと限らず、一般にかゝる方法の重要性は相當に認められてゐる筈である。マルクシズムの立場からは、近代合理主義、民主主義、自由主義、功利主義等の發展は、近世資本主義の生成發展過程の精緻な分析を基礎として、説明され、批判されて居り、更に現代のイデオロギーについても、資本主義の爛熟及び危機の基礎の上から批判されてゐる。「ブルジョア民主主義」「プロレタリア民主主義」の區別も、自由主義とブルジョア民主主義との關係も、マルクス＝レーニズムにおいては、かゝ

る社會經濟的發展の基礎の上に、社會科學的に規定された範疇であつて、決して單なる言葉や概念の遊戯ではない。從つて著者が近世合理主義、功利主義に思想の源を求められる場合にも、これらの思想の歴史的社會經濟的背景への考慮を拂はるべきであつたと思ふ。

（二）マルクス・エンゲルスの勞作は尨大であり、しかもそれらが一大體系をなしてゐる。唯物辯證法は世界觀であり、世界の物質的統一と運動を、その内的多樣性において觀察するものである。この唯物辯證法の自然への適用が自然辯證法であり、社會への適用が唯物史觀である。カントに於いて分裂せしめられ、ヘーゲルにおいて觀念的に統一された自然と社會とが、マルクスにおいては唯物的に統一されてゐる。しかもかゝる一大體系は、マルクス以前の思想、科學の批判、歴史の批判、或ひは資本主義社會の批判を通じてのみ展開されてゐるのであるから、一班を以て全豹を推す式の解釋はこの場合不適當である。

更にマルクシズムは、意識の客觀的存在的基礎を分析することにより、資本主義社會の意識の錯覺、錯倒を解明するものであるから、先入觀やブルジョア・カテゴリーの「物神崇拜性」とマルクスの呼ぶ意識からは、一見誤つて見へ、かゝるブルジョア意識は嚴しい科學的批判をうける。往々あり勝ちのことであるが、始めからマルクスを批判せんとする意圖を以て、その著作の問題の個所のみを讀む場合には、その全貌と本質は把めない。先づ先入觀を去つて、これを理解しようとして讀み、マルクシズムの全體系を充分把んだ上で批判はなさるべきであらう。このことはひとりマルクスと限らず、偉大な劃期的思想家を理解する場合に云ひうることであるが、マルクスの場合特にこの感を深くする。從來のマルクシズムを繞る論爭にも少なからず、かゝる傾向が見出される樣に思はれる。

この點で、マルクスを最もよく理解し、更にこれを發展させ且つ實踐したものはレーニンであらう。殊にマルクス・エンゲルス以後のマルクシズムを語るためには、レーニンを缺くことは出來ないし、その農業理論、帝國主義論、革命理論、戰略戰術論のみならず、唯物辯證法、唯物史觀についても、マルクス理解の歪曲を是正するために、果したレーニンの功績を忘れることは出來ない。

それだけに唯物史觀批判の著者の立場を強固に武裝するためには、マルクス以後の新カント派、修正主義、改良主義等、共産主義者の呼ぶ所謂マルクシズムの歪曲、新しいブルジョア・イデオロギーを繞る論爭に對する、レーニンの哲學的批判と勞作についての徹底的な反批判をもつと展開していただきたいという感想をもつ。また著者は、プレハーノフ、ブハリン其他のものを屢々引用されてゐるが、これらについてはレーニズムの立場から激しい論爭と批判がなされてゐるのであるから、レーニズムを批判せんとする著者はこれらを引用する場合に、これらに對するレーニズムの批判をも、もつと詳細に吟味さるべきであらうと思ふ。

マルクシズムにおいて頗る重要な範疇となつてゐる絶對主義及びボナパルティズム等の國家形態に關し「國家がたとひ一時でも仲裁者として、對立する階級から獨立しうるものとして存在することを承認するのはマルクス主義にとつて極めて不徹底な、その核心をすら害ふところの讓歩ではないかと私は思ふ」（一三八頁）と云はれてゐるが、これらの問題はマルクシストの間で深刻な論議と研究が展開されてゐるだけにこの批判は不用意と思はれる。殊にマルクシズムに於けるプルジョア・民主主義の分析を理解するためには、絶對主義の正確な把握が前提とされるからには尚更のことである。

四

次ぎに著者の唯物史觀批判の問題に移らう。唯物辯證法は單なる唯物論と辯證法との機械的結合ではなく、唯物論

は辯證法をまつて始めて近世の素朴唯物論、機械的唯物論の缺陷を脱したものである。唯物論と辯證法、唯物辯證法と唯物史觀、唯物史觀とマルクス經濟學、これらは切り離すことの出來ぬ全體系をなしてゐる。物質と空間と時間と運動、自然と人間・社會・歴史、物質と精神、存在と意識等、從來バラバラに分裂して理解されて來たものを、統一したものがマルクシズムである。少くともマルクシストはこのように主張している。從つて唯物史觀の唯物的一面性を批判せられる前に、唯物辯證法における唯物論の特質を明確に把握し、これを批判する用意が肝心であると考へる。然るに著者は唯物論については論ずる資格なしとして、辯證法的唯物論の批判を放棄され、辯證法だけは認められる。從つて著者の認められる辯證法とは、唯物辯證法でないとすれば、論理の上の辯證法と見ざるを得ない。客觀的實在性の辯證法ではなく觀念論的辯證法と見ては悪いであらうか。著者の論旨の隨所に覗はれるところでは、論理は論理として存在し、客觀的實在性の發展法則としては理解されてゐない樣である。例へば、歴史的相對主義批判の箇所において、相對性を脱するためには、客觀的論理の存在を豫定せねばならぬとし、思惟の範疇の超歴史的存在たることを基礎とせねばならぬと云はれてゐる。これは一應、エンゲルスの文献を主に引用し乍ら絶對的眞理と相對的眞理の問題を明確にしたレーニンの説明（「唯物論と經驗批判論」第二章參照）と同じ結論の樣に見へるが、その立場は根本的に違ふ。レーニンの場合は、絶對的眞理は客觀的實在性であつて、われわれの知識がそれに近づいて行く限界は歴史的に條件づけられてゐるが、この眞理の存在は無條件的だし、われわれがそれに近づいて行くといふことも無條件的だと云ふ意味である。從つてその認識の正しさ――われわれの知識と對象の客觀的本質との符合――を證明するものとして實踐が强調される。ところが本書では、この點は頗る曖昧であり、むしろ絶對的眞理とは、客觀的實在に代つて觀念的な普遍妥當性、客觀的論理がおかれてゐる樣に解される。從つてまた、唯物史觀に於いては一般的法則を認めるが、一般的法則がそのまゝであるのではなく、これはあくまでも各歴史的法則を貫いて自己を實現すると云ふ辯證法的立場から認めてゐるのに對して、本書においては、超歴史的な思惟の範疇と云ふ樣なものが豫定されてゐる。故に唯物辯證法において最も重要な實踐と云ふ契機は、本書においてはとり上げられず、たゞ一つの理論が現實の解釋として妥當かどうか、これだけが問題とされる。從つてこの立場からは「哲學者は世界をいろいろに解釋してきたゞけだ。世界を變革することが眼目だらうに」と云ふマルクスの有名なテーゼの本旨、更にひいては革命の意義もつかまれなくなる樣に思はれる。

であるから、以上の樣な著者の立場は、唯物史觀批判に明瞭に出て來る。即ち辯證法は認めるが、唯物論は論ずる資格なしと謙遜され乍ら、歴史發展の動因としては、「文化價値」、「理性」と云ふ樣な理念を、恰も先驗的なものゝ如く、無批判的――少くとも本書の敍述の上からは――に提出され、これを基礎として自己の主張と唯物史觀批判を展開されてゐる。先きにも述べた樣に唯物辯證法の批判なしに、唯物史觀を批判することが元來無理であり、唯物史觀の理解を放棄するものと云はれても仕方がない。更にその批判の武器としての「文化價値」とか、「理性」とか云ふ新カント派的概念自體が、唯物辯證法の立場から批判されてゐるのであるから、尙更新カント派的立場に對する批判の反批判の必要が痛感される。かゝる用意がないと、著者の唯物史觀批判の立場自體が、唯物史觀の立場からは、ブルジョア的觀念論だと反批判されても仕方がないように思はれる。マルクシズムはとに角觀念論批判の上に立つて唯物辯證法を展開してゐるのであるから、この反批判こそ著者の立場を確固たらしめるものであらう。

尙、歴史的相對主義の問題のところで、マルクス主義が果して著者の注意せる如き、絶對的眞理の存在と認識の可能性を豫定することによつて悪しき相對主義に陷らぬだけの自覺と用意をもつてゐるかを疑ふ樣な敍述であるが、こ

れも文獻的にも腑におちぬことである。レーニンの前掲書を待つまでもなく、既にヘーゲルが辯證法は相對論の契機を含んではゐるが相對論に歸着はせぬことを明らかにし、勿論、マルクス・エンゲルスは何れもこの點を注意してゐるのであるから。

次ぎに「必然性の時間的限定性」と云ふ著者の批評に移らう。マルクシズムでは勿論、辯證法的發展を階級社會にのみ限ると云ふが如き、時間的限定はやつてはゐない。生産力と生産關係との矛盾が社會發展の原動力であると云ふ唯物史觀の公式は、單に機械的に理解されてはならぬ。先づ階級鬪爭がこの社會的矛盾のすべてであると云ふ誤解が指摘されねばならぬ。マルクスは確かに共産黨宣言の冒頭において「從來の一切の社會の歴史は階級鬪爭の歴史である」と書いてゐる。然しこれには後にエンゲルスが註釋をつけて、「正確にいへば文書によつて傳はつてゐる歴史のことである。一八四八年には、有史前の社會史は、すべての書かれてある歴史より以前にあつた社會組織は、まだ殆んど知られてゐなかつた」その後はハクスタウゼン、マウレル、モルガン等によつて原始共同社會の内部組織が明らかにされ、階級なき段階が明示されたことを注意してゐる。マルクスの誤りはその認識の歴史的限界性として容認されてよいであらう。階級なき原始社會には發展はなかつたか、決してさうではない。生産力と生産關係の矛盾はあり、原始社會の發展があつた。エンゲルスは「家族・私有財産・國家の起源」において階級なき原始社會の發展過程を唯物史觀の立場から見事に分析してゐる。社會的矛盾＝階級對立と解する著者の唯物史觀理解はこれをどう見るのであらうか。

勿論、生産力と生産關係との矛盾は、生産力の一定發展段階において生産手段の私有を生み、階級社會を出現させた。それ以後の社會の矛盾は階級對立・鬪爭に集中的に表現せられて來たことは唯物史觀の指摘するところである。

從つてまた、生産手段の私有と社會的生産との間の、資本主義生産の矛盾が廢棄せられた曉には、階級對立と云ふ矛盾が止揚せられることも唯物史觀の豫測するところである。然し、階級なき共産主義社會においては、生産力と生産關係との矛盾が消滅して、社會發展が停止すると考へることは、唯物史觀の豫測するところではないと思はれる。先づ資本主義から過渡期の段階を經て、社會主義社會へ發展し、更に人々が能力に從つて働き、能力に從つて分配される社會主義社會から、人々が能力に從つて働き、欲望に從つて分配されると云ふ共産主義社會に至るとマルクスは豫測するのであるが、――このマルクスの豫測は基本的には正しいと思はれるが將來社會の豫測であるから頗る抽象的たるを免れぬし、ソ聯の今日の實踐は更に具體的に問題を展開している――一つの社會形態から他の社會形態への發展と云ふ意味の展開は、これで止まる。何故ならば原始・古代・封建・資本主義・社會主義共産主義と云ふ五つの社會經濟構成の轉化は、生産力と生産手段所有關係の矛盾を基礎として展開されたものであり、社會的生産と生産手段の社會的所有と云ふ段階に至れば、かゝる點における矛盾はなくなり、從つてまたかゝる意味における社會經濟構成の形態變化の原因もなくなるからである。然し乍らかゝる轉化が止まつたからと云つて社會の矛盾が消滅し、その發展が止まると云ふことにはならない。社會は生産力が發展する限り發展する。生産手段の所有關係は、階級社會においては生産力の發展を、促進し或ひは阻止する最も重要な決定的契機であつた。然しこれだけが抽象的、機械的に理解されてはならぬと思ふ。共産主義社會になつて、マルクスのいふ階級關係といふ基本的矛盾は消滅しても生産力を阻む人々の關係、組織の問題は、尙も殘されるものと豫測される。生産力の發展は不斷に行はれるのに對して、人々の關係、人々の組織は比較的に固定的である。從つて當初生産力を促進しこれに適應した生産關係も、後にはこれを阻止するものとなる。生産力と生産關係との矛盾は從つて尙も存する。たゞこれが生産手段の所有關係を基礎とし

た階級關係といふ矛盾ではなく、且つ人間の意識的統制を超越した矛盾でもない。從つて、この矛盾は、人間の意思による管理の下に漸次除去しうる性質のものであらう。自然對人間の問題のみが殘されると云ふ見方は正しくない樣に思はれる。自然と人間との關係は、勿論發展し、對自然鬪爭に人間の力は飛躍的に集中しうることゝなるであらうが、自然に働きかける人間は一人ではなく社會を構成してゐるのであるから、この社會の生産關係、經濟構造はつねに益々合理的に、生産力を阻げるものから促進するものへと、生産の高度化するに伴つて發展せしめられねばならぬし發展せしめられるであらう。

但しかゝる豫測は、社會主義が世界の一部に生成しつゝある過渡的段階の現在においては、歴史的限界を免れない。かゝる豫測は抽象的、方法論的たらざるを得ない。たゞソ聯における社會主義建設途上における豐富な經驗に關し、これを資本主義への逆行と後向きに見ず、絶へず前方に目を注ぐ場合には、階級の基本的關係が消滅してからも階級關係とは本質を異にする人々の關係が生産力と生産關係の矛盾として尙も存することが豫測されうる。（レオンエフ「社會主義の經濟學」その他參照、本誌昭和二十三年一・二月號中山三郎氏紹介文參照）

ついでに現在のソ聯において階級對立がプロレタリアと農民との間に依然としてあり、スターリンは現在において國家の死滅を寧ろ否定してゐると云ふ著者の批評について一言したい。ソ聯は現在社會主義の經濟構成に到達してゐる。然しこゝに未だ、舊い經濟制度が漸次消滅し乍らも殘されてゐると云ふことは決して唯物史觀と矛盾しない。工業は國有化し、資本家對プロレタリアと云ふ基本的階級對立がソ聯の國內で止揚されたことは認められるであらう。然し農業は社會主義化したとは云へ未だ工業の水準までは來てゐない。コルホーズはあくまでも共同組合的所有であつて、私的所有・私的生産より發展したとは云へ、過渡的なものであり、プロレタリア國家の下においてのみ社會主義への推移をなしうる形態である。從つてコルホーズ農民に未だプチ・ブル的殘滓があり、工業プロレタリアートと全く同じレベルに到達したものとは云へない。從つてこの間に相違のあることも事實であるが、これがプロレタリアートと基本的に對立すべき獨立の階級をなしてゐると見るべき根據は漸次消滅しつゝある。むしろ工業の發展に伴つて農業の工業化が進み、農民の工業プロレタリアと同水準への發展が見透されると云ふ事實の中にこそ、重要點を見出すべきであらう。

またスターリンが國家の死滅を否定してゐると云ふことも、一國社會主義の現在においてゞあつて、根本的に理論的變化を示したものでは勿論ないであらう。即ちプロレタリアの敵は國內の資本家であるのみならず、國外の資本家でもある。國內の資本家階級が止揚されたからと云つて、對外的關係を忘れてしまふことは、机上の空論家のみである。從つて、プロレタリア國家は世界資本主義との對立が止揚され、更に各國內資本家勢力の復活條件が一掃されるまでは消滅しうる筈がない。

最後に唯物史觀は唯物的な一面觀であると云ふ著者の批評を問題としよう。結論から云へば著者自身が唯物史觀を一面的に觀るものではなからうか、著者の唯物史觀の一面的、機械的理解が、かゝる批評を生む原因ではなからうか、といふ疑問が生じて來る。

著者が物質と云ひ、經濟と云ふときの物質、經濟なるものは唯物辯證法の物質、唯物史觀の經濟とは似て非なるものゝ樣に感ぜられる。即ち物質は運動と切り離され、唯物論は辯證法と切り離され、意識と存在と實踐とはバラバラにされ、自然と社會、論理と客觀的實在性、社會形式と物質的內容、一般的法則と特殊的法則、經濟と上部構造、觀念形態とは切斷されて考察されているのではあるまいかと思はれる。これらの統一こそ辯證法の特質であるのに、辯

證法を認めると云はれる著者は、辯證法的に唯物史觀の說くところを理解されようとしないように讀みとられる。

「從來のすべての唯物論の主要缺陷は、對象が現實性、感性が客體または直觀の形態のもとにのみ執へられて、感性的・人間的活動、實踐として執へられず、主體的に執へられざることである。だから活動的方面は、抽象的に唯物論とは反對に觀念論――それは當然、現實的、感性的活動をそのまゝに認めないもの――から展開された」（マルクス）

これがこゝにもあてはまる樣に感ぜられる。從つて唯物史觀と經濟史觀や經濟主義との本質的差異は著者においては明瞭にはされてゐない樣に感ぜられる。マルクスが最も問題とした現實的、實在的人間性、それの歷史的、經濟的束縛よりの解放と云ふ面は、むしろ單なる物質的利害打算でのみ動く個人としてリカァドオの經濟人にまでひき下げられてゐる樣に思はれる。そして精神的・理性的・道德的人間性の抽象的主張を以て批判の武器とされてゐる。またマルクシズムにおいて最も重くとり上げられてゐる生命の生產活動、勞働、實踐と云ふ實在的、歷史的概念はどうしたわけか一顧も與へられず、これに代つて人間的「創造」と云ふ樣な抽象的概念が主張されてゐる。マルクシズムがその存在的基礎から分析批判したブルジョア的個人のイデォロギーを以て、唯物史觀を理解し、これを批判せんとすることは元來無理ではなからうか。

次ぎに階級及び革命理論の問題に移らう。本書は歷史における階級鬪爭觀の否定として、「階級意識にめざめてゐない社會集團はしばしば對立したが、又しばしば互に聯繫した。社會の種々なる集團が相對的に共同利害の爲に結束すること……そこに錯雜した對立のあることも認められる。ある問題について對立する二つの集團が他の問題については一つの集團として他の集團と對立することは屢々起る所である。地主と小作人との對立は、農業生產物對工業生產物の問題については共同の利害關係をもつて立つてであらう」と云ふ批評をしてゐる。果して、これがマルクス階級社會觀の批判となるであらうか。こう云ふ事實はマルクスは百も承知であらう。しかも尙階級の對立と鬪爭を通じて歷史を見るのは何のためであらうか。必然と偶然との關係について著者が唯物史觀の解釋を紹介したのはどういふ意味であつたらうか。偶然の無限の繼續を通じて必然が現れて來ると云ふエンゲルスからの引用はどう理解されるべきであらうか。もしもかゝる批評を以て、偶然と必然とを混同してしまふならば、社會科學そのものが見失はれてしまふであらう。

次ぎに階級分化の批評もまた同じ感想を抱かされる。マルクスはブルジョアジーとプロレタリアートを資本主義社會の基本的階級として規定した。これは單なる思ひつきや、偶然的な分類ではない。資本論を始め其他の精緻な資本主義社會の現實的構造分析に基くものである。しかも現實社會がこの二大階級だけでないこと、資本主義的生產關係が支配的となつた社會に於いても、舊い經濟制度の殘滓が複雜な階級層を現出すること、更に資本主義は一方に右の基本的二大階級への分化を促進し乍ら、他方には舊い制度を再編成し、大工業の外業部や下請等として近代家內工業・家內勞働を背後に維持すること、或ひはマルクス以後の獨占資本主義の段階においては新しい中產階級の絕へず發生すること、更に農村の階級分化に至つては益々複雜であること（これはマルクス・エンゲルス以後特にレーニンがよく分析してゐる）等々、階級分化の分析は、マルクシズムの最も精緻を極める問題であつて、こゝで述べてゐるわけには行かない。著者のこの問題に關する紹介と批判は些か粗雜の感がある。何よりもマルクス＝レーニズムは社會發展の必然性を無限の多樣性の中から把み出さうとして、階級分化の錯雜せる中から、基本的なものと偶然的、副次的なもの、進步的なものと反動的なもの等々を識別するために辯證法的科學的努力を傾注してゐるものであることを注意していたゞきたい。

たゞこゝで著者が指摘してゐるアメリカの階級分化の特質（コーリン・クラークによる）は注目すべき問題である。これについては今こゝで論ずる餘裕もないが、例へば、英國の若き學者ヒッチの指摘する、アメリカ資本主義の爛熟を現はす、産業の生産面より、サービス面への重心の移動からの説明等も、クラークのものと並んで興味あるものである。但しかゝる新中間階級が獨占段階に生成すると云ふことは、二大階級への基本的分化と、資本主義の基本的矛盾の深化、恐慌と列强の對立と云ふ樣な必然的動向を否定するものではないものと考へられる。

資本主義社會の階級分化の複雜性とその利害の對立、同一階級内の分裂と各派の對立、これらの多樣、複雜さの中から、發展の基本方向、必然性を把み出すことこそ、肝要であつて、この複雜、多樣性の中に溺れてしまふことは社會科學の放棄ではなからうか。從つてマルクス＝レーニズムは、この基本線をあくまで貫かうとして、プロレタリア階級の統一、更には、農民、中間階級をも含めた人民戰線、或ひは民主戰線の意識的統一に努力するのであつて、基本階級と基本的矛盾を認識する立場からは、これは當然のことであらう。

ところが著者は、この多樣性並びにプロレタリア階級内の對立磨擦の現象から、むしろマルクス＝レーニズムを批判し、その代りに各階級、各黨、各派の利害の協調、妥協、超階級的利害、全體的利害の統一の方向を指示してゐる。かくして著者は結局、階級そのものを否定し、ひいては革命を否定する立場を明らかにして來る。このことはまた辯證法を認めたと云ふ著者が、辯證法的發展を認めてゐないことを自ら示すものではあるまいか。

五

唯物史觀に基くマルクスの資本主義崩壞の豫言が當らなかつたと云ふことは、部分的には正しく基本的には正しくない樣に思はれる。マルクスの表現に覗はれる樣な速度で資本主義は崩壞しなかつたし、マルクスが明細には豫測し得なかつた帝國主義の段階が、彼れの死後到來したと云ふ事實は、マルクスの認識の歷史的限界を示すものとして承認せねばならぬ。更にまた、マルクスが東洋的世界について當時の條件下としては驚くべき洞察力を示してゐたとは云へ、その視野は西歐を中心としてゐたと云ふことも爭はれない。偶然的契機を最も多く含む、國際關係や各國民の動向の豫測においても著しく歷史的制約をもつてゐたことも確かである。然しこれらのマルクスの認識の歷史的限界は、彼れの唯物辯證法、唯物史觀、資本主義分析等の基本的な客觀的價値を損ふものではない。時間的には遲れたとは云へロシアに於いて資本主義は崩壞し、第一次大戰、一九二九年以降の世界恐慌、第二次大戰、戰後の現世界の動向を通じて、マルクスの豫測し得なかつた幾多の偶然性とジグザグコースを辿つたとは云へ、偶然性を通じての必然性の貫徹と云ふ觀點より見れば、マルクスの分析して遺した遺産は、矢張り確證されてゐる樣に思はれる。

マルクスを繼承したレーニンが、マルクスのこの歷史的限界を補つた。マルクスの適確に豫測し得なかつた獨占資本主義段階、帝國主義段階、世界資本主義の展開に應じて、マルクスの基本を修正することなく、この新段階に應ずるその發展を行つたのがレーニンであらう。更にマルクスにおいては、同じく歷史的限界、西歐的視野、プロレタリア運動の未だ充分成熟しなかつたこと、等のため未だ未熟であつた實踐理論を展開したのもレーニンである。著者が、レーニンはマルクスの革命理論を「修正」したと云ふことも、右の樣に解するのが自然であらうと思ふ。更にレーニンがロシア革命において成功し、ドイツでは社會民主黨が革命に失敗したと云ふことを、單にロシアの特殊的偶然的條件からのみ理解することも一面的であらう。また機械的な必然論から説くことも誤りであらう。これは、唯物辯證法における可能性と現實性の問題と考へる。革命は資本主義の一定の發展水準に來なければ實現するものではない。然し資本主義の爛熟、崩壞を人間の能動的活動から切り離して、自然必然的に考へ、革命條件の自然成長を待つ

ことは誤りであり、ドイツの社會民主黨の失敗がこれを示してゐる。帝國主義段階における世界經濟的聯關は、資本主義の矛盾を國内的に現すのみならず、國際的關係において、世界的規模において現はす。從つてまた資本主義的先進國は、後進國の搾取を通じて自己の矛盾を緩和し、革命を延ばすことが出來るし、後進國が資本主義の一定段階に到達して居れば、この國際的聯關のために、先進國よりも資本主義的矛盾を激化し、その支配階級は弱まり、プロレタリアートは相對的に強くなるためにかへつて革命の可能性を現實性に轉化することが容易となる。ロシア革命はかゝる場合と考へられる。可能性は必然性を内的に包んでゐる。これを現實性に實現するものは、人間社會にあつては實踐である。從つて主體的條件は輕視することは出來ない。ロシアに資本主義の一定水準への成熟と革命の可能性がなかつたとしたならば、如何に偶然的條件が革命に幸しても革命は實現されなかつたであらう。ドイツにも革命の可能性はあつたが、これを現實性に轉化する實踐が誤つた理論に歪曲されて必然性をつかむことが出來なかつたと見るべきであらう。ロシアにおいては革命の可能性（内的必然性）が成熟して居り、これを實現する實踐が必然性を把む方向に正しく指導されたから革命が成功したと見るのが妥當であり、この點から見て、レーニン並びにボルシェビキの理論と實踐は必然を把握しており、從つて客觀的に正しかつたと云ふことになるであらう。然しロシア革命の經驗の一切が、恒久的、固定的に正しいと云ふが如きは機械的な誤りであらう。現實は具體的であり豐富であり、且つ運動してゐる。ロシア革命の實踐も然りである。

六

次ぎにマルクシズムと民主主義及び著者の主張される民主主義の問題に移らう。著者はベンサム流の自由主義・民主主義の根本精神――マルクシズムより見れば、ブルジョア民主主義、更に嚴密に云へば產業ブルジョアジーの自由主義――の立場から、マルクシズムは本質において民主主義の精神と合致せぬものであり、特にその革命理論について見ればこの革命が民主主義的性格をもつたものではなく、專制的な性格のものであることは明白である、との理由からマルクシズムが民主主義に非ざることを强調されてゐる。確かにマルクシズムは著者の云ふところの民主主義の精神とは合致せぬものであり、革命もまた著者の云ふ如き民主主義的方法で成功しうるものでもない。マルクシズムはむしろ著者の云ふところの民主主義精神の本質、その階級的基礎、そのブルジョア的性格を鋭く曝露し、著者の云ふ如き民主主義によつては革命は否定され、プロレタリアは永久に現狀に甘んぜざるを得ず、ブルジョアジーの支配をあくまでも存續せしむることゝなると云ふ客觀的法則性を明らかにせんとするものであらう。現に著者においては階級闘爭も革命も民主主義の理念に反するものとされ、勞資協調と妥協とを重ねることを通じての漸進的進化のみが眞に民主主義的とされてゐる。しかもこれが「全體の利益」の名において唱へられてゐる。マルクシズムは、これとは逆に資本主義社會經濟構成の現實的分析から、かゝる理念が全體の利益と云ふ言葉において、如何に現實の搾取關係の正體を覆ひかくし、搾取され支配されることを未だ自覺せぬ勤勞大衆の意識を欺瞞して來てゐるかを、科學的に實證せんと試みるものである。從つて、マルクシズムにとつては理念が第一の問題ではなく、客觀的現實のあり方が問題なのであるから、このマルクシズムの事實分析の反批判こそ、著者のマルクシズム批判の土臺とさるべきものと思はれる。自由主義の創始者達の時代には、未だ資本主義社會の階級的矛盾は充分成熟せず、彼等の思想を歷史的に限界づけてゐたが、それでも正直、卒直に現實を見ようとする彼等は、樂觀主義の中にも矛盾を直感してゐた。たゞ彼等はその歷史的限界の故に、平等に對して私有財產の安固を先入觀的に固執してゐたが。當時の時代と今日では問題が違ふ。だからマルクスは、スミス、リカァドオ以後の自由主義經濟學を俗流經濟學と呼んでゐる。卽ち事實の矛

盾の前に目を覆ひ、先輩の云つたことを時代の變化にも拘らず機械的におし通し、結局においてブルジョア階級の支配の永續のために意識・無意識に拘らず奉仕する結果となつてゐるからである。

既に述べた如く、著者は、自己の抱く民主主義の理念にマルクシズムが合はぬからと云つてこれを拒ける前に、マルクシズムの事實の分析、少くとも資本主義の分析、（或ひは更にブルジョア革命其他に關する政治的分析）の再吟味と批判とに論點を集中すべきではなからうか。問題は觀念的な理念の中にあるのではなく、客觀的な實在の中にある。論理の矛盾にあるのではなく事實の矛盾にある。これがマルクシズムの立場である以上、階級や革命を否定し、理性や民主主義の理念を強調する代りに、先づマルクシズムの事實分析の批判から始めてもらひたかつた。かくてこそ超越的批判よりもつと有力な內在的批判が完成される筈である。著者は唯物史觀の是非はそれが現實的正しさの如何にある、と云ふ正しい方法論的態度を宣明し乍ら、現實的分析批判の面では斷片的にしか著者の見解は窺はれないし、著者自身の民主主義の理念の實證的基礎づけも殆んど見られず、既にマルクシズムが現實的基礎分析に立つて批判しているところの、近代合理主義精神とイギリス自由主義理念を、採用して居られる。

著者は、民主主義は一つの政治的方法であるが、その背後には一個の指導的價値理念がある、この理念の點で對比さるべきものは專制又は獨裁政治の理念であるとされて、すべて問題は理念に歸し、理念の現實的基礎、民主主義又は獨裁政治の具體的內容は餘り問題とされていない樣に讀みとられる。而して民主主義の理念、基本精神は近代合理主義及び功利主義精神であり、經濟的自由主義がそのまゝ行へなくなつた今日においては、根本精神は變らぬが、眞の社會的自由を保障するための國家統制、計畫經濟が必要であり、或ひはこれを社會主義と呼んでもよいが、然し、階級の利害對立は、妥協協調を以て、全體の利益增進の目標を以て調和し、飛躍的革命はさけるべきで妥協を通じての漸進的進化の道を辿らねばならぬ、これが民主主義の理念に一致する道であり、社會主義は民主主義の理念實現のための手段であると主張される。こゝでは次の諸點が問題となる。

一　著者の主張する民主主義の理念・根本思想の具體的、現實的內容、それを現代社會で實行するとどう云ふことになるか。近代合理主義精神及び功利主義の現實的基礎如何。

二　階級對立は根本的に一致しうるものか、根本的に一致し得ぬとしても、妥協、協調の過程で漸進的に解決しうるものか。資本主義と社會主義とはその質差を單に量的なものに還元しうるものか。一つの社會經濟構成から他のそれへ移ることはマルクシズムの云ふ革命を否定することによつてなしうるか。更に封建社會から資本主義への變革は、政治革命を伴つたものであるが然しその過程は自然成長的であつた。これに對して資本主義から社會主義への發展は、政治革命なしに行きうるものか。また政治革命を必要とするとしても自然成長的に行きうるものか、それとも意識的に行はねばならぬものか。現代資本主義社會の現實的條件の下で、これらの問題は實證的に解決されねばならぬと思はれる。

三　著者自身、嘗ての經濟的自由主義を否定されて國家統制の必要、計畫經濟の方向を認める考へ方をとられてゐるが、この變化は何によつて生じたものか、唯物史觀を否定される著者の立場からはどう說明されるか。

四　著者の云ふ計畫經濟或ひは社會主義とは一體何か、その理念は著者の云ふ民主主義であるが、これは客觀的、具體的に見れば、どう云ふ本質のものとなるであらうか。更にこれを實現する現實的方法、大衆敎育の問題等々の解決策如何。

以上の樣な問題については本書のなかで何れもふれられてはいるが、その論證、特に實證が不充分の樣に思はれ

る。勿論二百餘頁の本書でかゝる問題の充分な論述を求める方が元來無理であるとは思ふ。著者の今後の展開を期待する次第である。著者の立場や見解についての誤解や理解不充分は多々あることゝ思う。從來多く見かける御座なりの儀禮的書評ではなく、讀後感じたるまゝを卒直に記すことが學問發展への道であると思ふので非禮をもかへり見ず妄言をつらねた次第である。

本書がマルクス＝レーニズムへの批判を主題としているものであるから、書評は自ら、この批判への疑問、特に本書の批判對象とされたマルクス＝レーニズムの立場から生ずると想像される問題點を中心とするものとなつた。從つて著者の民主主義に關する積極的主張が、同種著述中に占める地位や、その從來の見解よりの一歩前進の意義等についてはふれるところがなかつたことをお詫びせねばならぬ。私もまたマルクスやレーニンのものを充分理解しているものではない。從つてまたこの批評も頗る獨斷と無理解の多いものであらうと思ふ。從つて、著者に對する獨斷とマルクシズムに對する獨斷との二重の罪を犯しているのではないかとおそれる。この點を御容赦乞ふ。

「附記」本稿は昨夏執筆されたものである。豫定では更に、一　マルクシズムと民主主義（特にブルジョア・デモクラシーとプロレタリア・デモクラシー及び人民民主主義の問題）二　戰後の民主主義の現實的問題を取扱ひ、最後に本書の民主主義の積極的基本見解について述べるつもりであつた。ところが私が昨秋來長期病臥したゝめ中斷せざるを得ず、約束の期限から一年を經過した上に書評の性質上餘りに延引してはどうかと思ひ、舊稿のまゝ掲載することとした。この點も併せて容赦を乞ふ。（一九四八・七・一〇）

伊東岱吉君の批評に答へる

氣賀健三

私の小著が刊行されてから、部分的な批判や感想は方々から與へられ、教へられる所も多かつたが、今度畏友伊東君が總體的に丁寧な批評を與へてくれたので、こゝに同君の好意に對して深く感謝すると共に、私の考へ方をもつと明かにし、又前著の不備を補ふ機會を得たことを喜ぶ、たゞ紙數の都合のため十分な解答にならないことを同君の好意に對して濟まなく思ふ。

伊東君の綜括的な批判としては、私のマルクス、レーニンの文獻研究が不十分、不用意であること、理解が淺く一面的でかつ部分的に止まつてゐることをいはれたが、之に對しては反撥する言葉もない。私は決してこれらの人やそのエピゴーネンの本を十分澤山といはれる程讀んでゐないので、そういふ非難は甘んじて受けなければならぬ。それは今後の勉強を重ねて同君のみならず讀者の叱責に答へるつもりである。それは伊東君自身が批評論文の最後に記した自分自身の反省の言葉と同一であらう。もつとも伊東君の場合には謙遜の辭かもしれないが、私のは謙遜でも何でもない。全く私の不勉強を省みての告白である。

併しそれはそれとして私は伊東君の具體的な批評には答へるだけの責任は果さなければならぬ。